

旭川の体育

旭川市立六合中学校 教諭 五十嵐 敬

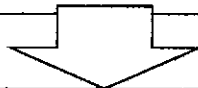
○旭川支部の活動について

旭川支部では、平成27年度より「自ら求め、積極的にかかわる体育活動～わかる・できる・のびる体育学習を目指して～」を支部の研究主題とし、研究の視点の中では、特に「子ども同士のかかわり合い」を重点とし、それが子どもの運動に対する意欲や知識及び技能、思考力・判断力・表現力等の育成につながる授業づくりを目指している。今年度は、現学習指導要領から新学習指導要領への移行に合わせ、その趣旨や内容をとらえて、「主体的、対話的で深い学び」に迫るテーマ設定や、解説の変更点をとらえた授業づくりを重点とした。

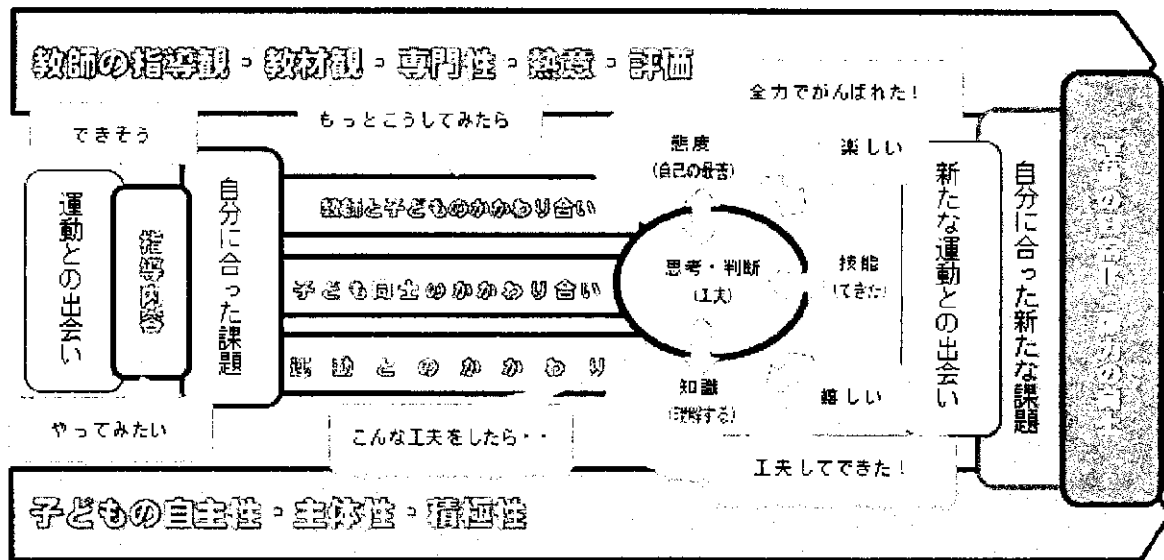
旭川支部 研究主題 「自ら求め、積極的にかかわる体育活動」 ～わかる・できる・のびる体育学習を目指して～

【研究仮説】

指導内容やかかわらせ方を工夫することにより、基礎となる運動技能を身に付けたり、体力を高めたりするとともに、自ら運動を求め、積極的にかかわろうとする態度を育てることができる



研究の視点1～指導内容の工夫	研究の視点2～かかわり合いの工夫
① 実態を踏まえた指導計画の作成	① 教師と子どものかかわり合い
② 目標の明確化，焦点化	② 子ども同士のかかわり合い【重点】
③ 場づくり，教材・教具の工夫	③ 子どもと運動とのかかわり



□「子ども同士のかかわり合い」を円滑にするための手段とは

- 話し合い活動の視点の明確化
- 運動のポイントの明確化
- 子ども同士の声かけの例示
- 話し合いの進め方や流れの指導
- 思考を視覚化するための用具（ミニホワイトボード・作戦ボード）
- 思考を表現しやすい学習プリントの工夫 など

○令和元年度の旭川支部研究大会

- 1 期日 令和元年10月16日(水)
- 2 研究授業

旭川市立共栄小学校 松本 祐士 教諭 第3学年 小型ハードル走
旭川市立東鷹栖中学校 宮本 廉 教諭 第2学年 武道【柔道】

■小学校研究授業の概要及び重点

「主体的・対話的で深い学び」が叫ばれる中、小学校部会では「学習者主体」「問題解決型」の授業を展開することで、主題に迫ろうと考え授業づくりをデザインした。重点としては、研究の視点2の、「子ども同士のかかわり」と「子どもと運動のかかわり」を重点とする。

児童が「小型ハードル走の楽しさとは何だろう？」というに問題意識をもち、それを追求する過程で「小型ハードルを調子よく跳ぶことができる」という技能を身に付けていく、5時間の単元計画を立てた。ハードル走の特性には、「仲間と競ったり、自分のタイムを縮めたりすること」があると考えが、「競う」という他者比較に抵抗がある児童もいる。そこで、「ハードルを調子よく跳ぶことの心地よさ」を運動の特性と押さえ、全ての児童がその心地よさを実感し、「小型ハードルの授業が楽しかった！」と言えるようにハードル走に対する苦手意識を生まないような学習展開とする。

1・2時間目（めあて①）では、様々な小型ハードルを並べたコースを走ったり、コース作りをしたりして、ハードルを飛び越える楽しさを追求する。児童は、速さの変化、高さの変化や均一の高さ、インターバルの変化、リズムの変化や一定のリズム、ハードルの形状や素材などに楽しさを感じると考える。そして、児童が協力をしながら自由に小型ハードルを並べ替えたり、曲線や折り返しのコースなどをつくったりすることで、小型ハードル走の楽しさに十分に触れることができると考える。

3・4時間目（めあて②）では、「調子よく跳ぶことの心地よさ」を実感させる。調子よく跳ぶことを、「リズムよく」「スピードに乗る」「気持ちよさ」を合わせたものと定義し、そのためにはどのような条件が必要であるかを追求する。児童は、何度も小型ハードルのコースを走って試行錯誤したり、友達と話し合ったりしながら、「ハードルの高さ」と「インターバル」を揃えたりリズムよく跳ぶことができることに気付いていくと考える。さらに、自分の体格や走る速さに合った高さやインターバルで走ると、スピードに乗ることができ、「きもちよさ」が加わり、調子よく走ることができると考える。

5時間目（めあて③）では、既習の学習を生かし、児童がどのように小型ハードルで楽しむかを考え、遊びを広げていく。

すでに、永山西小と共栄小の3年生で、同単元で2度の授業を行い授業の検証と改善を図り、旭川支部の研究大会に向けて、研究を進めているところである。

■中学校研究授業の概要及び重点

新学習指導要領において、第1学年及び第2学年の柔道では、次の点に変更されている。

- ・基本動作や基本となる技を用いて簡易な攻防を展開すること【知識及び技能】
- ・攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えること【思考力・判断力・表現力等】
- ・一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとする【学びに向かう力、人間性】

実際の授業では、基本動作の反復に時間をかける展開となり、技が正しくできたり、それらを用いた攻防をしたりするまで発展しないケースが多く、生徒にとっては同じ動作の繰り返しとなり、楽しさを感じることができない。これを踏まえ、今年度は、生徒が柔道の楽しさにふれることができるよう、ゲーム性を取り入れた様々な活動を取り入れることで学習意欲を喚起させ、基本動作や基本となる技を身につけさせることをねらいとした。

本時では、学習指導要領で記載されているものの授業でほとんど取り上げられない「固め技の返し方」に焦点を当てる。受が取にけさ固めで抑えられた状態から、抑え込みの条件が満たされなくなった瞬間を「返した」とおさえ、相手に応じた効果的な返し方について、個や集団で考えさせる。個人思考では、2人1組で取と受を交替して行い、返し方の方法を考えさせる。次に、集団思考において、新たに3人グループを組み、各生徒の考えを実践交流し、グループの中で効果的な返し方を考える。その後、別のグループと試合形式で実践し、「効果的な返し方のポイントとは何か」ということに迫る。

個人思考で考えた様々な方法を仲間と共有することにより、多様な考え方があることに気付かせるとともに、試合形式の実践的な学習活動を通して試行錯誤することにより、返し方は、相手の動きや力を利用しながら行うことが必要であるということに気付かせる。また、まとめの場面では、各グループで考えた効果的な返し方をわかりやすく発表させるとともに、返し方のポイントと結びつけて、学習を振り返る流れとする。